

明智光秀公の人間像・魅力を探る ～～ 称念寺門前居住10年を通して ～～

文責 松本 盛博

1 光秀公と称念寺

光秀は美濃国（現 岐阜県可児市）の齋藤道三の嫡男義龍に敗れ、1556年称念寺に逃れてきた。逃亡先を称念寺に決めた理由

- 光秀は清和源氏一族であり、称念寺は同じ源氏一族の**新田義貞公墓所**がある。
- 当時の称念寺は天皇の勅願寺であり、暴力禁止の寺、**駆け込み寺(アジュールの寺)**であった。
- 光秀の母(お牧)の腰元(竹川)は、若狭武田家の出身であった。光秀が幼小時に若狭で**称念寺の住職(菌阿上人)**と逢ったことがあった。**菌阿上人の招きがあった。**

2 光秀公が10年間(1556～1565)称念寺門前に妻子とともに居住していたという証拠

- 遊行**31**祖京畿御修行記に明記されている。
時宗の第31代目の教主の同念上人(1518 - 1587)が、天正6年(1578)7月から1年8ヶ月かけて時宗布教のために、東海や関西を旅した修行日記(本能寺の変の2年前の日記)に10年間居住明記
- 明智軍記に掲載あり
江戸時代中期の元禄初めから15年頃(1688~1702)に書かれた明智光秀を主人公とする軍記物語
- 「**黒髪伝説**」として、**現在も地元で伝承** 江戸時代の絵本豊臣勲功記
称念寺の住職が、朝倉義景の家臣を招いて連歌の会を催した際、熙子は夫光秀のために、自分の髪を切り売りして、接待費に充てていた。おかげで光秀は朝倉義景への仕官がなかったとか。絵本であることから、一般庶民も手軽に読め、今日まで地元で伝承されている。光秀が義景の家臣となった歴史文献は全くない。
- 芭蕉の「**奥の細道**」の俳句に
芭蕉は奥の細道の道中**1689**年8月8日、称念寺に立ち寄り、光秀の称念寺門前で生活の様子を俳句に詠む。「月さびよ 明智が妻のはなしせむ」
- 近隣に光秀公絡みの末裔と名乗る家、光秀絡みの名字の家**が現在も存続している。
長崎区や加賀山代温泉付近に「明智」、あわら市内や加賀市内に「明父」「阿慈地」「阿地知」等

3 称念寺門前での10年間何をしていたのか。

- 武士としての教養を習得と時宗の宗教から人類愛や人権思想を学ぶ。
称念寺に巡回してくる時宗の遊行僧や従軍僧から、全国の情報や医療技術を学ぶ。当時の称念寺は光明院の倉を運営していた(現在での物流会社、銀行)。商業や物流、経営学等を学び、称念寺菌阿上人や雄島の大湊神社の神官より、文化的教養、連歌短歌等を学ぶ。また山代温泉で、医学薬草学を学ぶ。明智家の復興と子孫繁栄を、本堂の「**新田義貞公像**」「**愛宕権現曼荼羅像**」に祈願していた。
- 門前で寺子屋を開く(住民への教育、医療活動) 現在その寺子屋跡付近が予測できる。
- 武者修業の旅(京の細川家、大坂堺へ鉄砲術、遠く毛利家に仕官)
- 舟寄の黒坂備中の守景久(一乗谷朝倉氏の出城)に仕え、一乗谷朝倉家への仕官を願っていた。
江戸時代の前期の儒学者の山鹿素行(1622 ~ 1685)が書いた「**武家事記**」には光秀は黒坂備中の守に仕えたと記述されている。景久や菌阿上人に口添えて、朝倉義景に仕官しようとしていた。

4 1565年5月19日に大事件が勃発(室町幕府第13代足利義輝が暗殺される) 光秀公は妻子を称念寺に残し、次期将軍擁立のために東奔西走する時期約3年間

足利義輝が暗殺(三好3人衆、松永久秀によって)されたことが、きっかけで、光秀と朋友の細川藤孝・大覚寺義俊は、義輝の弟の覚慶(足利義秋と改名:三好松永軍に、奈良の興福寺一乗院に監禁されていた。)を次期将軍に擁立しようと、1566年7月に義秋を救出し、一乗谷朝倉館に保護しようと、その交渉役に抜擢されたのが光秀でした。細川藤孝が光秀を会して交渉のために朝倉氏を訪れたのが1566年9月のことでした。光秀は朝倉義景の確約を得て、尾張の織田信長の協力を得て、義秋は近江矢島、小浜、敦賀金ヶ崎等を経て、1567年11月に無事、一乗谷朝倉義景に動座(保護、義秋は義昭と改名)した。次は義昭を室町幕府の将軍に擁立するために、京の朝廷に上洛することになるが、この際、朝倉氏は共に上洛は拒んだ。光秀は朝倉を諦めて、1568年7月越前を去ることになる。岐阜の織田信長と合流し、9月に上洛し、義昭は第15代室町幕府将軍となった。(※第14代将軍足利義栄は、三好松永軍が擁立)光秀は15代将軍擁立するために東奔西走する約3年間(1565年5月～1568年9月)、義景や義昭との面会や交渉時には、福井市東大味に借り住まいした所が、現在の明智神社となっています。

5 その後、光秀公は信長の家臣となり、信長政権を支える、1570年4月、安曇川高島田中城で、朝倉義景討伐計画、1571年9月信長の比叡山焼き払い、1573年8月一乗谷城下焼き討ちに光秀参戦、1575年8月越前一向一揆の戦いに光秀参戦し、豊原寺焼き払い。1579年光秀は丹波国を平定し、亀山城、福知山城築城し、領民のための政治を行っていた。光秀の領民にとっては、正に乱世に突如現れ、善政を司る天下人につくという中国の神話の「麒麟」だったのかも知れません。ところが1582年6月1日本能寺の変を起し、6月13日の山崎の戦いで、戦死してしまう。称念寺門前居住10年間で学んだ、武士としての教養、武術、経営学、宗教倫理学、人類愛、夫婦愛等で、一流戦国武将となり、先進的な天下を左右する力量を発揮するものの、悲運な麒麟となって散っていった。

本能寺の変の要因はいろいろあるが、信長の「**唐入り政策**」「**信長の野望**」を打ち砕く事件であったのではないか。この唐入り政策は。後の豊臣政権での朝鮮征伐の失敗と短命、徳川の鎖国政策による長期政権、明治期の日清日露戦争、昭和期の太平洋戦争の大敗や戦禍として窺われるものです。これらは正に光秀の「**先見の明**」とも言えます。平家物語冒頭の「**おごれるものは久からず**」忘れてはならない。